

〈書評論文〉

「女兒選好」

—— 中国農村部における家族変動 ——

Lihong Shi,
Choosing Daughters: Family Change in Rural China
 (Stanford University Press, 2017)

宋 円 夢

1 はじめに

19世紀末、食料不足、雇用危機、貧困と格差などの人口増がもたらしかねない社会問題を危惧し、西洋における新マルサス主義者は避妊による産児制限を唱え始めた。後に「バース・コントロール」(1914年)と名付けた避妊推進の運動を起こしたM.サンガーの20年代初頭の訪日、訪中をきっかけに、バース・コントロールが東アジアに伝来した。戦後、中国が1979年に正式に決定した「一人っ子政策」は国家が法律的制度的に産児制限を定めた最もドラスティックな例である。しかしながら、家父長制が根強く存在し、福祉政策が都市より遅れている中国の広範な農村地域において、「老後の世話や後継ぎになる息子が何としてもほしい」という例外なき「一人っ子」に対する大きな反発が起こった。その挙げ句に、家父長制と儒教の「孝」観念による伝統的な「男児選好」への国の妥協としての「一・五子」体制(第一子が女兒であれば、第二子が生める)は1986年から農村地域のみを実施されていた。

「一・五子」体制という背景の中で、中国の東北地域にあるLijia村において、第二子の出産が規制されていないにもかかわらず、一人の女兒のみを産み、大事に育てる「女兒選好」が1990年代不意に登場した。このような、伝統的な家父長制による男尊女卑に逆行している「女兒選好」はなぜ20世紀末に出現しただろう。Lijiaの村人はなぜ骨折って得られ

た第二子（息子）を産む権利を放棄したのだろうか。

著者の L. Shi は新興の「女兒選好」に吃驚し、2002～2012 年の間、17 ヶ月にわたり、Lijia 村の村人と共に生活した参与調査、40 組以上の一人娘を育てる夫婦を対象とするインタビューと、248 組の生産年齢層の夫婦を対象とする世帯調査を行った。Lijia 村は都市部に近く、交通機関が発達した便利な村で、本書での Lijia 村に関する描写はそのほとんどが 2006 年頃の様子である。これらの調査をふまえ、著者は「男児」から「女兒」へのリプロダクティブ・プレファレンスの大転換が起こった理由を、夫婦たちの人生観・育児観、家族関係の力学及び親と娘の繋がりの変化から検討する。

著者の Shi は生殖をめぐるポリティクス・家族・ジェンダー関係を専門とするケース・ウェスタン・リザーブ大学の研究者で、公的・私的領域両方にある変形している家父長制という 21 世紀の中国家族の新しい動態を扱った *Transforming Patriarchy* (2017) や、漢族の家父長制と女性への抑圧を中国全体のジェンダーシステムと捉える従来の研究に、少数民族を含む異文化衝突という視点を取り入れた *Women and Gender in Contemporary Chinese Societies* (2011) などの共著がある。

本書は 6 章からなる。第 1 章では中国における家族計画の経緯及び Lijia 村での応用、村人の反応を描いている。第 2 章では村人の幸福観が物的消費・余暇享受に再定義され、第 3 章では、数多くの子供をいい加減に育てるのではなく、一人の子供を男女によらず大事に育成するという新たな育児観を指摘している。第 4、5 章では、老後は息子と息子の嫁に頼る慣習が消えている社会変化と、息子の結婚費用を負担する親の経済の重荷を示している。さらに、後継ぎの息子の代わりに、経済力が家族の社会的地位を判断する新たな基準となったため、息子を持たない家族への差別が軽減していると第 6 章が論述している。

第 1 章を除いた残りの 5 章は「女兒選好」の出現を社会的・経済的・文化的という三つの側面から解釈している (17⁽¹⁾)。本書評はこれに基づき、「経済的变化という土台の上で、様々な社会変化が起こり、人々の考え方が変わる」という理屈に従いながら、本書の内容を整理する。

2 本書の概要・整理

2-1 経済的要因——市場経済の発展（決定要因）、息子の結婚費用の重荷（第 5 章）

例外なき一人っ子という厳しい規制による短時間での出生率の激減は想像に難くない

(1) 本稿は本書のページ数を数字で略記する。

が、家父長制の伝統を覆す「女兒選好」はなぜ1990年代という時点に登場したのだろうか。

この問いへの直接の答えは本書では提示されておらず、また、「女兒選好」の出現要因に対する重要度ランク付けがなされていない。しかし、本書全般を通して、市場経済の発展とそれによる世帯収入の急増は村人の価値観・人生観・育児観の変化及び「女兒選好」の出現を促した根本的な要因となることを知ることができる。

70年代後半からの集団農業経営体制の解体と市場改革は2点の大きな意義を持つ(49)。1点目は農業における「家庭聯産承包責任制」という請負制の実施と非農業に従事する機会の獲得により、村人の世帯収入が著しく増加した。2点目は村人の社会的・政治的生活への国の監視(集団労働と政治的キャンペーンへの強制的な参加)の弱体化により、村人が余暇時間を豊富に持ち、多様な経済的・社会的活動に自由に参加できるようになった。一方で、男性のみならず、女性の非農業的就労機会の増大と共に、世帯収入に占める割合が急増し、家族の様々な意思決定に対する影響力・支配力が強くなっている。これらの市場経済の発展による社会変化は90年代の鄧小平「南巡講話」をきっかけに、新たな段階に入り、後述の「女兒選好」が出現した幾つかの理由の不可欠な背景となる。

また、息子の莫大な結婚費用が人々を「女兒選好」に導く一つの重要な経済的要因となる。多くの中国人が結婚と出産を不可欠な人生儀礼と見なしており、Lijia村においても、結婚できない男性は優秀でも勤勉でもないただの失敗者と思われている。しかし、男性が結婚できないほとんどの理由は個人特性というよりもむしろ、家族の貧困によるものである(109)。伝統的な「男兒選好」による女子胎児の中絶が深刻な男女比の歪みを招いた。さらに、女性は生活水準を上げるため、裕福な地域または都市部出身の男性を結婚相手として選びやすい。そのため、農村地域における結婚年齢の女性が結婚市場での高位を占めるようになり、結婚相手の家族に求める経済要求が次第に高くなってきた。

高騰している結婚費用の内訳は主に結納金、住宅、ジュエリー、オートバイ、家具、結婚披露宴という六つの部分からなる(111)。無論、結婚年齢の若い男性は自分の力で負担できず、家族(両親)が息子の代わりに負担しているのは極普通である。息子の結婚費用を負担しない親は村人に軽蔑されるに止まらず、時には結婚年齢を超えても結婚できない息子に憤られ、恨まれることもある。従って、多くの未婚の息子を持っている家族は多大なストレスがたまっており、息子が十代半ば頃から結婚費用を貯金し、結婚のための住宅を用意する。そのため、莫大な借金を背負うようになった家族も少なくはない。たとえば息子が順調に結婚しても、親がその婚姻を守るため、嫁との親睦を守り、若い夫婦の婚姻の早期に、身体的・経済的な援助を提供する責任がある(119-124)。つまり、後述の変化した老後の世話をする息子の役割に見合わない多大な育児負担により、第一子が女兒である

多くの夫婦は息子を怖がるため、第二子の出産を抑える。

2-2 政治的・社会的要因（第1、4、6章）

経済的要因に加え、本節では政治的要因となる従来の厳しい産児制限（第1章）及び、社会的要因となる息子による親孝行（第4章）という伝統の変化から「女兒選好」の登場を議論する。

まず前提として、Lijia 村（東北地域）における計画出産は全国でも屈指の厳しさといえる。計画出産をやりとすため、「教育・説得・監視」と「最後の手段としての脅迫」が実行されていた。「教育」は、ミーティングにより、村人に国の政策を教え込むことである。「教育」が失敗し、認められない妊娠が起こった場合には、家族計画に関わる役人がその家に深夜でさえ頻繁に訪問し、人工中絶を説得する。また、生産年齢層の女性に対し、使用中の生理用品のチェックを要請するほど厳重な監視がなされた。それでも規制された子供数以上の子供を思い切って産みたい夫婦に対し、強制的な人工中絶、結紮手術が強要される。このような厳しい産児制限のもとで、当初は、村人の産みたい子供の数・性別という生殖に関わる意志が政策に反する場合、村人は自分の意志を通すため、逃亡したり、女兒を中絶したりしていた。やがて80年代になってから、多くの村人が計画出産を受け入れるようになり、90年代以後、一人の娘のみ産み育てる夫婦（特に若い夫婦）が増えてきた（25-40）。

一方で、Lijia 村における世代間の繋がりや親孝行のあり方が変化した。伝統的な家父長制と孝道は息子夫婦が老後の親の面倒を見ることを要求している。しかも、単なる食事、排泄の介助のような日常的な世話のみならず、親の指示を守り、責められても不満を口に出さないほどの精神的に従順な態度が求められる。しかし、近年 Lijia 村において、高齢者は老後の経済・心身の独立を追いかけている一方で、結婚した娘との繋がりが強くなり、娘による親孝行が増えている。このような変化はなぜ起こったのだろうか。

本書は3点の要因を取り上げたが、筆者はその背景としての前述した女性の労働市場参加、収入増に伴う家族での地位の上昇を主要因と捉える。また、男女比の歪みも女性を婚姻における高位に導く。これらの女性の婚姻におけるエンパワーメントは2点の影響をもたらした。一つ目の影響は、女性が自分の両親に親孝行をする経済的余裕をもつようになった（本書での「世代間の繋がりの変化」の1点目の要因）。二つ目の影響は、夫が妻の態度・意見を常に配慮せざるをえなくなり、妻と自分の両親との軋轢があれば、親孝行を放棄し妻に妥協する場合も少なくない。つまり、家父長制における親の至上の権威が消滅し、親に対する無条件な孝心が世代間の互惠関係に変わった。親孝行をする条件としては、まず

親が子供の教育、キャリア、息子の結婚費用をサポートしないといけない（本書での2点目の要因：「再解釈された世代間関係」）。また、本書での3点目の要因は若い夫婦の結婚後の住所の変化と男性より女性のほうが情け深いという社会的イメージである。結婚した娘による親孝行は頻繁な訪問とそれに伴う情緒的・身体的サポートとして表されている。Lijia村周辺の多くの夫婦は同じ町、またはバスで簡単に行けるほど近い地域出身同士であるため、結婚した娘の実家への頻繁な訪問が可能になった。

以上の厳しい産児制限、世代間の繋がりや親孝行のあり方の変化という政治的・社会的要因により、従来の「男児選好」が下火となり、新たな「女児選好」が興っている。

2-3 文化的要因（第2、3章）

政治的・社会的要因以外に、本節は村人の消費観（第2章）、育児観（第3章）、「後継ぎは息子」（第6章）という観念上の変化から「女児選好」にアプローチする。

集団農業体制下では、各戸の収入に大した差がなく、村人の物的消費・欲求は比較的に低かった。ところが、市場経済の発展による世代収入の急増・所得格差の増大、村人の社会生活への国のコントロールの弱体化により、村人の消費観・消費行動が変化した。村人は以前のような生存を維持するための基本的な物的消費のみに満足できず、楽で便利な生活を追求するようになった。都市部における最新の物的消費の潮流に乗れるということが、村での社会的地位の象徴として見られるようになった。村人はより多くの金銭を物的消費のほか、DVDやテレビの購入、麻雀・ポーカーの遊びといった娯楽・余暇活動にかけるようになった。その結果、子育てにかかる莫大な金と時間が、若者のこのような消費観・消費行動の意志を通す際の障りとなった。

また、数多くの子供をいい加減に育てるより、一人の子供が成功者になれるように家族のあらゆる資源を尽くして育てたほうがましだという育児観が出現した。成功であるかどうかは個人の社会経済的地位（十分な経済力、安定した仕事）によって判断され、成功者は裕福な生活を送れるのみならず、両親の老後の世話を見る余裕もあるとLijiaの村人は信じている。成功できる子供を育成するためには、衣・食、玩具、誕生日会などの日常的な費用から、教育費、就職活動のサポートまで莫大な養育費がかかる。また、村人は教育が子供のウェルビーイングに役立ち、社会階層の上昇移動にもつながると信じており、子供の教育を特に重要視している。大学生一人にかかる年間の教育費、食費、家賃とその他の必需品は少なくとも15,000元（2007年）であるが、一人が非農業に就業している3人の核家族の世帯年収は12,000～23,000元（2006年）のみである（78,158）。他方、村人が子供の成功を性別に結びつけることは減多になく、子供の性別によって違う扱い方をする

ことにも大反対している。娘の教育にも大金をつぎ込む現象が、この村のジェンダーバイアスのない子育て観を表しているだろう。

さらに、「後継ぎの息子を生まないといけない」という伝統的な考え方の文化的・宗教的・社会的意義が変化した。組織的・文化的側面から言えば、家族の継続を重視する信念は常に発達したりネージ（親族集団）に絡んでいる。Lijia 村を含む東北地域の多くの住民は 19 世紀、北部からの移住民の子孫で、強いリネージが形成できる程の世代がたまっていない。また、新中国成立後から 80 年代まで、国がリネージと祖先崇拜を打撃し、父系集団の萌芽はリネージになれる資源と組織的サポートを得られないまま終わった。宗教から言えば、祖先崇拜という信仰の元で、祖先の名誉・権威・地位を守り、よい来世を送るための唯一の方法は、最低一人の男性の後継者を産むことである。ところが、80 年代以後、祖先を祀る儀式は単純に先祖からの加護を期待し、来世の幸せを祈るためでなく、「故人を偲ぶ」、「不孝と村人からの非議を免れる」などの多様な動機によるものになった。また、既婚女性が自分の祖先を祀ることができないというルールがなくなった。このような祖先崇拜の衰退と後継ぎに関わる女性の役割変化は息子を必ずしも必要としなくなった。社会的側面から言えば、後継ぎの息子の代わりに、経済力が家族と個人の社会的地位を決める決定要素となった。市場改革後、農村コミュニティにおける経済的・政治的・社会的地位がより階層化された。経済力の高い家族は最新の物的消費・余暇活動の潮流に乗れることに加え、子供の教育費、息子の結婚費用を負担する余裕もある。さらに、裕福な家族は他の村人に役立つ経済的資源を持っているため、社会的ネットワークを広げやすい（132-146）。要するに、「後継ぎの息子を生まないといけない」動機がなくなったため、従来見られた村人の息子への執着と、息子を持たない家族への差別が消滅している。

以上のように、本稿では、本書で述べられている Lijia 村における「女兒選好」が出現した理由を経済的・政治的・社会的・文化的などの側面から整理している。

3 本書の意義や位置づけ

「圧縮された近代化」に伴う急速な少子高齢化、高学歴化、個人化を経験してきた中国において、世帯規模の縮小、離婚率の上昇、晩婚化ないし生涯未婚の急増などの変化が進んでおり、従来の父系大家族が多種多様な新たな家族形態に取って代わられた。このような多様化している中国家族の中で、著者は Lijia 村での伝統的な「男兒選好」に逆行している「女兒選好」という新たな生殖パターン（reproductive pattern）を取り上げ、その背後にある多様で複雑な生殖に関わる選択・決断がなされる経緯を各方面から突き詰め

た。本書で取り上げられた家族計画が比較的順調に進んできた Lijia 村のみならず、紆余曲折した過程を辿った湖南省の B 村において、21 世紀に入ってから、「第一子が女の子で第二子が出産可能でも『指標を返還』する人も出現するようになった」。「その背景には、政策の執行が厳しくなって『超過出産』が容易ではなくなったことだけでなく、生殖年齢の夫婦の考え方が変化していることがあった」（小浜 2020: 325）。つまり、本書で得られた知見は他の地域で出現した新たな家族形態と共通点があり、他の地域を議論する際、参考になるだろう。

一方で、本書で述べられた村人の消費観、育児観、ジェンダー役割の変化などの「女兒選好」に導く多様な要因は逆に、子供の数・性別という生殖に関わる意思決定に限らず、現在の中国で進んでいる晩婚化と増えている DINKs などの様々な新たな社会現象や家族形態を解説する際にも応用できる。また、家族計画が全国に先立って行われ、目立った結果を残した Lijia 村で出現した第二子（息子）を産む権利を放棄した「女兒選好」から得られた知見が 2016 年以後の全面的な「二人っ子政策」の実施困難（出生率の低下）を理解する際、参考になるだろう。つまり、本書は多様化している中国家族の中のただ一つとして「女兒選好」の形成を解明したが、それにとどまらずより多くの社会変化の帰結ともなれると本書の意義を評価しても差し支えないだろう。

著者は「女兒選好」が出現した要因として、現在中国における「女性の社会や家族における地位向上」、「老後の世話や後継ぎになる息子の必要性の低下」というジェンダー役割の変化を取り上げている。表面上は家父長制の衰廃に伴う女性のエンパワーメント、自主性の獲得のように見えているにもかかわらず、内実は家父長制の衰廃というより、国家政策へのある種の妥協にすぎないと筆者は考えている。なぜならば、多くの人々が娘より息子の結婚に多大な財力を注ぐべきだと容認しているからこそ、男性側の家族が負担する結婚費用は高騰しているからである。「子供の性別による扱い方の違いに対する反対」(第3章)は、子供の教育や子育ての仕方に止まっており、結婚や生殖という家族の継承と見られていることに直面する際、女兒より男児のほうに大金を注ぐことは村人の暗黙の合意となっている。また、2016 年の全面的な「二人っ子政策」の実施と共に、「女性側の両親は娘の姓を継ぐことを前提として、若い夫婦に第二子の出産を催促するが、男性側は子供が女性側の姓を継ぐことを認めない」という家庭内での軋轢が頻繁に起こり、大騒ぎになった。家父長制のもとでの後継ぎの問題は計画出産の緩和と共に、（特に若い夫婦の両親の世代において）復活しているとはいえるだろうか。要するに、本書で論述されている「女性の地位向上」などのジェンダー役割の変化は「一人っ子政策」のもとで、男児のみならず、女兒も家族の後継ぎとして認められるようになったという家父長制の妥協に過ぎない。女

性がこの過程の中で、家族からのより大きな支持を受けつつ、受動的に自主性を持つようになっていくが、家父長制や家族の束縛から完全に自由になることができない。また、産児制限の緩和による顕在化している家父長制に伴い、女性が再び家父長制大家族に包摂・束縛するようになる可能性がまだ存在している。

一方で、中国は国土面積が広く、地域差が大きく存在しているに加え、近年目覚ましいスピードで発展・変化している故に、本書で取り上げられた 2006 年頃の Lijia 村という事例は、どのぐらいの範囲で適用できるかという一般性・汎用性の問題が残っている。2016 年の全面的な「二人っ子政策」により、「一人っ子政策」のもとでのジェンダー規範は新たな変化が生じていることは既に論述した。また、「女兒選好」のほか、「男女一人ずつ」という子供の性別に対する選好がより顕著になっている（江ほか 2018）ため、男女一人ずつの子供を持つ家族が新しいスタンダードな家族形態の一つとして増えている。つまり、計画出産の大転換を経験している 2010 年代の中国において変化しているジェンダーや家族のあり方を分析する際、90 年代に登場した家族形態・ジェンダー規範をそのまま応用する限界性を看過することはできない。

また、本書で述べたように、Lijia 村が属する東北地域は「強いリネージが形成できる程の世代がたまっていない」などの特異性を持っている。東北地域においての「一人っ子政策」は全国の中でもかなり厳しく、しかも、比較的順調に進展してきたことは他の研究にも指摘されている（小浜 2020: 221）。2018 年の東北三省の出生率（6.39%、6.62%、5.98%、中国国家统计局 2019）はそれぞれ全国の下位 3 位を占める。つまり、Lijia 村は全国の中でも特に家族計画が成功している例で、より広範な農村地域に敷衍する際は検討しなければならない。要するに、90 年代に Lijia 村で出現した「女兒選好」という事例は現在中国で起こっている様々な家族形態やジェンダー規範にまつわる変化を理解する際、参考になる意味を持っているが、その時代性や特異性を考慮しなければならない。

最後に、本書のもう一つの問題点と考えられるのは、一人の娘のみがいる夫婦に中心を置くと、一人の息子のみを育てている村人や、第一子が娘であり、違法な手段で胎児の性別を判明するほど如何にしても第二子には息子を産みたい村人たちの声が軽視されてしまいやすいことである。農村地域において、第一子が女兒の場合は、男児の場合より第二子の出生意欲が高いと指摘され（田ほか 2017）、「女兒選好」が出現したが、「男児選好」が消滅したわけではない。そのため、「女兒選好」という新しい生殖パターンが社会全体に占める割合や位置付けを解明する必要があるだろう。

以上のように、本書は事例調査として、その適応できる範囲に限っているという一般性の問題が存在している。しかし、そうであってもなお本研究は、現在中国において出現し

ている様々な新たな家族形態を検討する際、参考に当たる例として貢献できる。また、Lijia 村の事例は、2016 年以後の「二人っ子政策」は単なる政策の転換にとどまらず、様々な経済的・社会的・文化的側面から具体的な支持・施策が必要となることを示唆している。

参考文献

- 江砥・董静・詹漠荣, 2018, 「生育新政之后民众二孩生育意愿影响因素探析——以湖北黄冈市区市民生育意愿随机问卷調查为例」『人口与發展』24 (3): 117-28.
- 田立法・荣唐華・張馨月・孫倩・張佳城・張海端・高建偉, 2017, 「“全面二孩”政策下農村居民二胎生育意愿影响因素研究——以天津為例」『人口与發展』23 (4): 104-12.
- 小浜正子, 2020, 『一人っ子政策と中国社会』京都大学学術出版社.
- 中国国家统计局, 2019, 『中国統計年鑑』中国統計出版社.

(そう えんむ・修士課程)